HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人参果考：『西遊記』成立史の一断面
Author(s)	中野, 美代子
Citation	北海道大学人文科学論集, 16, 77-95
Issue Date	1979-03-21
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34343
Type	bulletin (article)
File Information	16_PR77-95.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

人参果考

――『西遊記』成立史の一断面――

中野美代子

一　玄奘と猴行者と人参果

明刊本『西遊記』第二十四、五回に孫悟空と猪八戒が人参果を盗み、沙悟浄ともども頒けあって食べたあげく、三蔵に叱責される条りがある。ここに描かれる人参果の形状は次のようである。

五荘観でこの仙果を供された三蔵は、「ギョッとして三尺もとびのいて」から、「何たることです！　今年は豊作だというのに、この道観では、こともあろうに人間を食べるなんて。これは生まれて三日とたたぬ赤ン坊（原文「三朝未満的孩童」）、それをお水がわり（原文は「解渇」）に下さるとは」と言う。三蔵が食べないので宙に浮いた人参果、「ふしぎなことに、とっておくことができない。時間がたつと堅くなって、食べられなくなる」しろものである。そこで道観の二人が食べるところを偸み見した猪八戒、孫悟空にそのことを話し、人参果を盗むこととなった。悟空、人参果をたたき落とすための「金撃子」を手に入れて庭に出ると、「まん中に大木あり、青い枝は芳香を放ち、緑の葉は陰森と茂っているが、その葉は芭蕉の葉に似ていた。木の高さは千尺あまり、根の回りは七、八丈もあろうか。悟空、木の下に立ってふり仰ぐと、南側の枝に人参果が一つ生（な）っている。まったく赤ン坊とうり二つ、尻のあいだに蔕（へた）があり、それで枝にぶら下がっているのだが、その姿は、真（げ）にも手足をバタつかせ、頭を振る赤ン坊そっくり、風が吹くと声を立てているみたいなのだ」という次第であった。

もとよりこの条り、明刊本『西遊記』では第五回にあたる「蟠桃を乱して、大聖　丹を偸む」に照応する。すなわち、天界において蟠桃園の番人になった斉天大聖、のちの悟空が、西王母の主催する蟠桃大会（たいえ）に先んじて蟠桃をあらかた盗み食いし、ついに天帝の怒りを買う次第だが、この蟠桃また、言わずと知れた長生の仙果として、くだんの人参果と双璧をなすものである。

ところで、『西遊記』の先行資料の一つとして著名な『大唐三蔵取経詩話』（以下『詩話』と略記）を見ると、ことがらは頗る異なる。その「入王母池之處第十一」は、話としては『詩話』中の圧巻である。試みに、ここを全訳してみよう。

さらに旅をつづけること数百里、法師は音をあげました。猴行者はそこで、

「お師匠さま、いましばらくのご辛抱ですぞ。五十里も行けば、西王母池ですから」

「お前は来たことがあるのかね」

「八百歳の時に、そこに来て桃を盗んで食べましたが、それから今に至る二萬七千年というもの、とんと来ておりません」

「いまもし蟠桃の実がなっていたら、三つ四つ盗んで食べたいものだな」

「わたしはその時、十個盗んで食べたばっかりに、王母にひっ捕えられて、左のあばら骨を八百回、右を三千回、鉄棒で打たれたあげく花果山の紫雲洞に流されたんです。今でもあばら骨が痛むくらいですから、盗んで食べる気なんてさらさらありませんよ」

すると法師の言われるよう、

「この行者はなるほど大羅神仙（道教神）みたいな奴だの。はじめこいつが黄河の澄むのを九度も見たとぬかした時は、ホラ吹きめと思っていたが、若い時にここに来て桃を盗んだと言うのを聞けば、どうやら本当らしいの」

そのまま進みますと、萬丈もあろうかという石の壁がにわかに出現、やがて又、四五里四方もありそうな平たい岩が見えます。その傍らには、数十里四方もあるひろい池が二つ、満々と水をたたえ、鳥さえ飛んでおりません。一行七人、やっとこさ腰をおろして休んでおりますと、はるかの石の壁に、数本の桃の木がこんもりと生えて、梢は青天に接し、垂れた枝葉は池につかっております。法師の言われるには、

「あれが蟠桃樹じゃないのかね」

行者は申します。

「しーッ。お声が高すぎますよ。ここは西王母池なんですからね。むかしのことがありますから、こわくて……」

法師かまわず、

「一つぐらい盗んでもかまわんだろう」

「この桃は、たねを一つ種えますと、千年たってやっと芽が出、三千年後に花が一つ咲き、一萬年で実が一つ生り、また一萬年で熟れるのですよ。こいつを一つ食べれば、三千年は生きられるのです」

「道理で、お前が長生きのわけだ」

「樹には今ちょうど十個あまり生っているようですな。でも、土地神があそこで番兵をしていますから、とりに行く手だてはありません」

「お前の神通力ならへっちゃらだろう」

と、その言葉の終らぬうちに、蟠桃が三つ、ころころポシャンと池に落ちました。

法師はたまげて、

「ありゃ、なんだ」

「いやなに、蟠桃が熟れて水の中に落っこちたんですよ」

「そんなら拾ってきて食べてもいいだろう」

猴行者、さっそく金環杖で平たい岩の上を三回叩きました。すると、子供が一人、それも青い顔、鷹のような爪、むき出した歯の子供が池の中からあらわれます。

「お前、いくつだ」

と行者がたずねますと、その子供、

「三千歳です」

「お前に用はないよ」

とて今度は五回叩きます。満月のようにまんまるい顔で、きらびやかな繡衣と首飾りをつけた子供があらわれました。

「いくつだ」

「五千歳です」

「用なし」

とて又もいくつか叩きますと、別の子供がピョコンとあらわれます。

「お前はいくつなんだ」

「七千歳です」

行者そこで金環杖を置き、パッと子供をつかまえて、

「お師匠さま、召しあがりますか」

和尚は肝をつぶして逃げだしました。行者がぐるぐるふりまわしますと、手中の子供、一個の乳棗となってしまいましたが、行者はそいつをパッと呑みこみます。のち、印度から唐土への帰るさ、蜀の地にてこれを吐き出しましたが、今もこの地に生える人参なるものが、これなのです。

空中からこれを見ていたお方あり、詩を吟じましたのに、

花果山生まれの暴れもの
ガキの時分にわるさした。
虫の報せに空から見れば
桃の盗っとがまた来たぞ。

この条り、いかにも面妖である。まず、三蔵が、あろうことか弟子の猴行者、すなわち孫悟空の前身に盗みを唆かしている。これについては、すでに魯迅が『中国小説的歴史的変遷』（一九五七年、人民文学出版社刊『魯迅全集』第八巻所収）の第四講「宋人之〝説話〟及其影響」において、『詩話』の作者は「市人」であったから、「唐僧がちっぽけな仙桃をいくつか盗んだところで何ほどのことがあろうかと考え、気をつかってわざわざごまかすこともせず、のびのびと書いてしまったのだ」と述べている。これに対し、太田辰夫氏は「《大唐三蔵取経詩話》考」（『神戸外大論叢』第十七巻第一～三号、一九六六年、所載）において、『詩話』のこの条りは、酒色を好んだと伝えられる善無畏三蔵（六三七～七三五。無畏 wú-wèi は無胃 wú-wèi に通じ、大食漢を指す隠語ともなる）にまつわる諸伝説が混入したものであろうと、数々の論拠を挙げて説明された。私も亦、いま太田氏説に与するものであるが、本稿においては、『詩話』のこの条りに見られる人参、すなわち明刊本における人参果の前身をなす珍果の性格のみを考えてみたいと思うのである。

二　人参と桃

人参果とは、申すまでもなく実在する植物である人参、すなわち日本人謂うところの朝鮮人参の形状からのアナロジーによって生まれた仙果である。

そもそも、人参とは、李時珍の『本草綱目』巻十二上によれば、人薄、黄参、血参、人銜、鬼蓋、神草、土精、地精、海腴などとも呼ばれた。根の形が人間のかたちに似ているところから古来神秘視され、又その薬性が頗る高いこと今日も渝らず貴重されていることからも知られる。

この人参をめぐる怪異譚は、しかし意外に少なく、李時珍が引く佚書『広五行記』に、「隋の文帝の時、上党のとある人家のうしろで夜な夜な誰やら呼ぶ声が聞えた。声のするほうを探しても分らず、一里ほど行ったところで人参の枝葉が異常なのを見つけ掘ってみると、地下五尺で人薄がとれた。人間の体そっくりで、四肢すべて具わっている。叫び声はそこで止んだ」と見え、『隋書』五行志下「草妖」の項に全く同じ故事が見えるのが殆ど唯一の記録であろう。尤も、劉敬叔の『異苑』巻二にも同じ話柄が見え、ただ、「赤ン坊のなき声をたてることができる（原文「能作児啼」）」となっている。恐らく、時代的には後者のほうが古い伝承であろうが、現山西省の上党が著名な人参の産地であるとは『本草綱目』にも誌すところ、類似の人参怪異譚は数知れず語られたことであろう。

人参は、しかしいかに薬草的価値が高いとはいえ、実在する植物である故に、長生をもたらす神秘的な仙果とはなり得なかった。もちろん、人参がめでたい植物であるとの記述は多く、それはわが『延喜式』が祥瑞として挙げているように、日本にも影響を与えた（日野巌『植物怪異伝説新考』一九七八年、有明書房刊、参照）。

神秘的な仙果のはなしなら数知れない。例えば――

『芸文類聚』などに断片的に引用されたものを、魯迅が『古小説鉤沈』において校録した佚書『漢武故事』にいわく、

東郡が一人の侏儒（原文は「短人」）を送って来た。身長は七寸だが衣冠はきちんと整っている。上（武帝）は山中の化物ではないかと怪しんだが、いつも案（つくえ）の上に置いて歩かせていた。そして東方朔を召してたずねることとした。朔はやって来るなり、その侏儒に、「巨霊よ、お前ときたら何だって急にこんなところに逃げてきたのだ。阿母（西王母）はまだ還っていないのか」と言ったところ、侏儒はそれには対（こた）えず、朔を指さしつつ上に、「王母が三千年に一度だけ子（み）をつける桃を種（う）えたところ、このわる（原文は「此児不良」）が三度も偸んだのでございますよ。それで王母のご機嫌をそこねて、ここに流されたというわけです」と言った。上はびっくりして、初めて朔が俗人でないことを知った。

東方朔が西王母の仙桃を盗んだために謫せられたとは、のちの『西遊記』における斉天大聖の偸桃鬧天の故事の祖型であろう。それはともかく、ここに見える侏儒の巨霊は、漢の郭憲の『洞冥記』巻四

では、武帝が愛した女人であって、帝の傍らに置かれた「青珉唾壺」を出入りしていたが、東方朔が見ると、青雀となって飛び去ったという。青雀ないし青鳥は、漢魏六朝の志怪においては概ね時間のシンボルとして登場する。ところで、この条り、班固の撰に仮託されている『漢武帝内伝』とも部分的に照応する。すなわち、東方朔が西王母を武帝に引き合わせてからの宴において、西王母が玉盤に盛った仙桃を帝に与えたところ、帝は食べてからその核をしまった。すると西王母が「この桃は三千年に一度だけ実が生るのですが、中夏は地味が痩せているから種えても生らないでしょうよ」と言ったので、帝は種えるのをやめた。

三千年に一度しか実をつけない果物なればこそ長生の仙果となる道理であるが、類似の故事は枚挙にいとまがない。いま少し例を挙げよう。

東方朔の撰に仮託される『海内十州記』――

扶桑は東海の東にある。（略）そこには椹（桑の実）の木があり、高いのは数千丈、太いのは二千かかえ以上もあって、一つの根から二タ株も対になって生え、おまけに互みに寄りかかっている。だから扶桑というのだ。仙人がその椹を食べたところ、体じゅう金ピカになって、いずこともなく飛んで行った。その木はこんなに大きいが、葉は椹ぐらいしかないので、わが国の桑に似ている。ところがその椹が珍なるものでまっ赤、そして九千年に一度しか実が生らないのである。

又、これも東方朔の著と仮託されている『神異経』には、

東方に、高さ五十丈、葉の長さ八尺もある木があって、桃という名だ。その子は直径三尺二寸あり、核ごと羹にして食べれば長生きできるのである。

又、少し下って梁の任昉の著に仮託される『述異記』巻上には、

磅礴山は扶桑を去ること五万里、太陽の光も及ばぬ甚だ寒いところだが、千かかえもある桃の木があって、一万年に一度だけ実をつける。一説によれば、日本国には、重さ一斤もの実をつける金桃があるそうだ。

この他にも、『太平広記』巻四百一十に録せられている柤稼樝樹実（三千年で花をつけ九千年で実る）、如何樹実（三百年で花をつけ九百年で実る）などはいずれも『神異経』に見える仙果である。ところで、仙果といえば、後代の西王母と蟠桃をめぐる諸伝説からして、『山海経』には仙果についての記述が数多いであろうと察せられようが、それが意外に貧困なのである。不老不死の観念は随所で素朴に語られるが、「不死樹」と明記したものは、「海内西経」に一つ見えるのみ、もっとも「海外南経」に見える交脛国の東の「不死民」には、郭璞が注して「海内経」の「不死之山」に生える「不死樹」と結びつけている。桃果については「西山経」に、「ここ（泑沢）に

はすばらしい果物がある。その実は桃のようで、葉は棗のようだ。黄色い花に赤い萼があり、これを食べると労れない」と見えるのが恐らく唯一の記述ではなかろうか。とはいえ、王充の『論衡』巻二十二「訂鬼篇」に、現行『山海経』には見えぬ記述の引用がある。すなわち、「『山海経』はこうも言っている。滄海の中に度朔の山あり、頂上に大きな桃の木がある。うねうねと曲りくねること三千里（原文は「其屈蟠三千里」）、その枝のあいだの東北のほうを鬼門といい、万鬼の出入するところである」というのだ。

いずれにしても、西王母と蟠桃とを結びつける記述、あるいは桃が不老不死の仙果であると明記した記述は、現行『山海経』には見あたらない。仙果について頻繁に録したのは、どうやら『神異経』『十州記』『漢武故事』など、いずれも東方朔との関連が深いものであることを、いまはひとまず記憶しておきたい。

ところで、さきにも引いた『述異記』巻上に、次のような不思議な記述がある。

大食王国は西海の中にある。一つのま四角の石があり、その石の上にはたくさんの木が生えている。幹は赤く葉は青い。どの枝にも赤ン坊（原文は「小児」）が生っている。六七寸の長だが、人を見るとみな笑って、その手足を動かす。頭が木の枝にくっついているのだが、枝を摘まむと、赤ン坊はすぐ死んでしまうのだ。

この記述、実は杜佑の『通典』巻一百九十三大食の項に次のように見えるのにそっくり拠ったものである。

その（大食国の）王はいつも衣服や食糧を満載した船に手下を乗せて大海原へと派遣するのだが、八年たってもまだ西岸を極めていない。海中に一つのま四角い石が見つかったが、その石の上には木が生えている。枝は赤く葉は青い。木にはいつも赤ン坊（原文は「小児」）が生っている。六七寸の長だが、人を見るとものは言わずにみな笑って、その手足を動かす。頭が木の枝にくっついているのだが、摘み取って手にすると、すぐ乾いて黒くなってしまう。王の使者が手に入れたその木の枝一本はいまでも大食の王のもとにある。

晩唐の段公路『北戸録』にも、最後の「王の使者が」以下を除いて同じ文が見えるほか、宋代の地理書『太平寰宇記』巻一百八十六大食国の項は『通典』と全く同じ記述である。ところで、『通典』に見えるこの不思議な記述は、杜佑の「族子」たる杜環が「鎮西節度使高仙芝に随って西征し天宝十載（七五一）西海に至り、宝応初（七六二）賈商の船舶に因って広州より回った（『通典』巻一百九十一西戎総序の項）その見聞に基いたもの。「西海に至り」とはいうものの、実は高仙芝軍がタラスの戦いに敗れたあと捕虜となってダマスカスまで連行され、帰国後に『経行記』一巻を著わしてアラブ世界での見聞を伝えた。『経行記』はいまでは佚書となっているが、『通典』が各所で引用しており、さらに清人の王国維が『通典』所引『経行

記』を校録して『古行記四種校録』に収めているのでその片鱗を窺うことができる。ここに引いた『通典』の記述が『経行記』からの直接の引用であるかどうかは必ずしも定かではないが、この話柄の出所が杜環であることは、杜佑と杜環の関係から見て疑いのないところである。

こうして見れば、『述異記』が六世紀梁の任昉の著であるという通説（例えば『漢魏叢書』本、『龍威秘書』本など）が誤まりで、「唐宋間の人の偽作である」とする魯迅の所説（『中国小説史略』第五篇「六朝之鬼神志怪書」）が正しいこと、ここからも明らかであろう。因みに、アラビアのことを「大食」と呼ぶようになったのは唐以後のことである（趙汝适『諸蕃志』に対する馮承鈞の校注など参照）。このことからも、『述異記』の成書年代が梁ではないと知られる。

いずれにしても、アラビアのさらに西方に人間の生る木が生えているという言い伝えが、こうして中国の文献に記録されたのだった。

三　ワクワクとマンドラゴラ

アラビアに生える人間の生る木といえば、ヨーロッパで十世紀ごろから語られたワクワクという奇怪な植物のことが想起されるであろう。このワクワクについては、澁澤龍彦氏の「マンドラゴラについて」（一九七〇年、桃源社刊『澁澤龍彦集成』第Ⅲ巻所収）に面白い説明がある。すなわち、

船で遠くシナ海を渡ってゆくと、ワクワク島という小さな島があり、その島に、イチジクの樹に似て、こんもりと葉の繁った、ふしぎな植物が生えている。三月の初めになると、椰子の実によく似た果実を生じ、その果実から、若い娘の足が生えてくる。やがて美しい腿、ふっくらした膝、小さな尻を次々に生じ、四月の終りごろには、女の子の肉体は完全に出揃い、五月には頭を生じ、髪の毛で枝からぶら下がるようになる。まことに可愛らしい娘である。しかし六月の初めになると、果実は落ちはじめ、中旬には、すっかり枝から落ちてしまう。そして落ちるとき、果実は「ワクワク」という叫び声をあげ、黒くなって、しなびて死ぬのである。落ちた果実は早く埋めてしまわないと、悪臭を発して、そばへ近寄りがたくなる。

この童話的幻想にみちた伝説は、ヨーロッパでは、十世紀ごろに書かれた『インドの神秘の書』という書物に最初に出てくる。似たような種類の記述はたくさんあって、十二世紀に書かれたアルメニアの地理学者某の書物にも、ほとんど同じことが語られている。娘たちが「ワクワク」と叫ぶところまで、すっかり同じである。

澁澤氏があげた『インドの神秘の書』とは、実は、ペルシャ系のブズルク・イブン・シャフリヤール Buzurk Ibn Shahriyār の著 *Kitāb 'Ajā'ib al-Hind* で、幸い藤本勝次・福原信義両氏による訳注『インドの不思議』（一九七八年、関西大学出版・広報部刊。関西大学東西学術研究所訳注シリーズ2）がある。それによると、本書は

西暦九五四年から一〇一三年までのあいだに著述されたものらしい。中にワクワーク（ワークワーク）島に関する記述が数個所あり、とくに「第三十八話」（ムハンマド・イブン・バービシャードがワークワークに入国したことのある者の話として語ってくれた話）が、この果実について次のように語っている。

――そこには長丸い葉をした大木が生えていますが、この木は瓢簞に似た、それより大きい実を結びます。その実は人間の形をしていて、風に揺れると、声を立てるのです。その中はウシャルの実のようにからっぽになっていて、木から切り離すと、たちまち気が抜け、しぼんで皮だけになってしまいます。ある水夫がその実を見て、気に入った形のものを選んで、持って行こうと木から切り取ったところ、気が抜けてカラスの死骸のようなものが後に残っただけでした。

これによると、くだんの果実は必ずしも若い娘の形をしているとは限らないようである。しかし、十三世紀ペルシャの著名な百科学者アル・カズウィーニーal-Qazwīnī の著 *'Ajā'ib al-Makhlūqāt wa-Gharā'ib al-Mawjūdāt*（『生きものの不思議と特異性』）の写本に見える挿し絵「ワクワク島の女王」（いま、Sir Thomas W. Arnold, *Painting in Islam. A Study of the Place of Pictorial Art in Muslim Culture*, 1965, New York, Dover Publications, Plate XXXVII. a. に見ゆ。**図1**参照）には、若い娘の首がたくさん生っている木が描か

図1　「ワクワク島の女王」

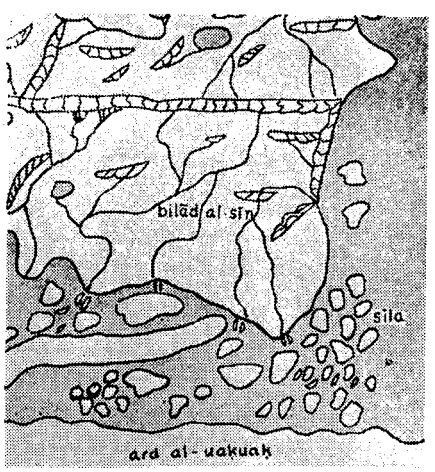

図2　イドリーシーの世界図に見える
ワクワク島（下方の uakuak）

れている。もっとも、ヨーロッパには、この興味ぶかい伝説はおそくとも十二世紀ごろには伝わっていたらしく、十二世紀アルサスの尼僧ヘルラデ・フォン・ランツペルク Herrade von Landsperg の著 *Hortus Deliciarum*（『悦楽の園』）の写本には、「アダムがワクワクの樹のそばに寝ており、神がこの樹の枝を折って、イヴを造ろうとしている図」（いま、澁澤氏前掲書三五三頁に見ゆ）が描かれている。「神の手に支えられたイヴは、枝からもぎ取られた果実のようで、胸から上の半身しかなく、両手はあるけれども脚はない」（澁澤氏）といった具合、この不思議な果実は、ついにキリスト教の創世伝説と結びつくに至ったのである。

ところで、ワクワク島であるが、桑原隲蔵の『宋末の提挙市舶西域人蒲壽庚の事蹟』（一九二三年、上海、東亜攻究会刊）が、アラビア文献においては「日本の国号は Ibn Khordâdbeh に Wakwak（Wâkwâk）として現はる。Wakwak とは当時支那人が日本を倭国と呼びし、その倭国の音訳なり」と述べているように、「倭国」の中古漢語音・*ua-kuok* の転訛と一応は考えてよいであろう。イブン・コルダードベー（現在はイブン・フルダードビフ Ibn Khurdādhbih とローマナイズされることが多い）とは、九世紀～十世紀初のペルシャの地理学者で、*Kitāb al-Masālik wa-l-Mamālik*（『道路と諸地方の書』）を著わした。もっとも、前掲『インドの不思議』に見えるワークワーク島の位置については、「シナの東にあるワークワークとは別のワークワークが存在するように考えられる」（前掲同書訳注一四四～一四五頁）という問題点もあるが、（十二世紀の地理学者アル・イドリーシー al-Idrisī の *Kitāb al-Rujārī*（『ロジェロ王の書』）に見える世界図では、このワークワーク島の位置を、現東南アジアに置いている。この地図は十六世紀末にヨーロッパに伝えられたが、それは織田武雄『地図の歴史』一九七三年、講談社刊、六〇頁に載っている。**図2**参照）位置はともかく名称に関しては、「倭国」の中古漢語音の転訛であり、それがアラビアの雑多な異国伝説と結びついてかような不思議な果実伝説を生んだといえそうである。

ワクワク島が中世アラビア圏の文献において倭国すなわち日本であるとすれば、そこに人間、それも若い娘が生る（な）樹木が生えているという伝説が存在したことはまことに興味ぶかく感じられる。

中国の文献では、大食（アラビア）に人間の赤ン坊が生る木があるといい、アラビアの文献では日本（ワクワク）に人間の娘が生る木があるという。しかし、日本を倭国としてアラビア人に伝えた中国人は、日本にさような木があるとは、どの文献にも記録していないのである。とはいえ、さきに引いた『十州記』『神異経』『述異記』などに見える長生の仙果が、いずれも、「東方」あるいは「扶桑」の地に生えるものとして記録されていることに注意されたい。さような仙果は、「東方」に限らず中国各地に産したとされているとはいえ、それがアラビアをはじめとする西方諸国に伝えられる場合には、中国よりも更に「東方」の地の果てに生えるとしたほうが、エキゾティックであろう。だが、そのことはもう少しあとで再考するとして、いまは、ヨーロッパ各地に伝わるマンドラゴラ伝説について触れておきたい。さきに引いた澁澤氏の「マンドラゴラについて」のほか、種村季弘氏の「マン

ドラゴラの旅」（一九七四年、青土社刊『怪物の解剖学』所収）及び「危険なマンドラゴラ」（一九七九年、桃源社刊『黒い錬金術』所収）などに拠りつつ要約する。

マンドラゴラとは、ペルシャ原産のナス科の植物で、その根が人間の脚のように二股に分かれており、しかもその股の部分に、時あって男根に似た突起や女陰に似た裂け目があるところから、エロティックな連想をひき起こしたのであろう、媚薬ないし強精催淫剤としてひろく用いられるようになった。旧約聖書に見える *dudaim*（訳名は「恋茄（こいなす）」）によって石女（うまずめ）が懐妊したという話はその最も古い例である。媚薬のみならず、マンドラゴラは又、麻薬や催眠薬の効果もあると信じられた。その他もろもろの病気や怪我にもよく利くとされたが、良薬のつねとして、多量に嚥めば有毒であり、ために数多くの不思議な伝説を生んだ。

最も有名なものは、マンドラゴラの採取に関する伝説である。各地で多少のヴァリエーションはあるが、概ねは次のようである。

マンドラゴラの採取法にはおそろしい危険が伴った。野生のマンドラゴラを根ごと手づかみにしようものなら即死は間違いなく、軽く触れるだけでも死の危険がある。フラヴィウス・ヨゼフス（紀元後一世紀のローマ人。――中野注）が紹介している採取法はかなり残酷なもので、あらかじめ生贄を一人選んでから数人の共同作業でおこなうのである。まず数人が目当てのマンドラゴラのぐるりに環を描き、周囲の土を根の最下部が見えるか見えないかのところまで掘り進む。それから生贄に選ばれた男が根を手づかみにして、マンドラゴラに反応があれば一気に引き抜く。この男は環になった一同の罰を一手に引き受けて即座に死ななければならないが、マンドラゴラは一度人間の手に渡ってしまえば危険はなくなってしまうので残り全員は無事である。

もうすこし穏やかな方法では、採取者は根のまわりに剣で三重の輪を描き、西の方を眺めやる。同時に数人の助手たちがマンドラゴラのまわりでぐるぐると輪舞を踊りながら問題の植物に猥褻な言葉を囁きかける。すると破壊的な効果がいちじるしく減殺されるのである。

やや後の時代に入ると、人間の生贄の替りに犬が使われたようである。周囲の土を根まで掘り進む手順は同じだが、次に根のまわりに注意深く索を巻き、その先端を犬の首に結びつける。それから肉片を犬からかなり離れた処へ投げやると、犬が猛烈な勢で肉の方へ走って行こうとするので、これに引張られて自然にマンドラゴラの根がすぽんと抜けてしまう。但し、その瞬間、近くにいる人間は掌で耳を塞ぐか、耳穴にあらかじめ綿か蠟の栓を詰めておかなくてはならない。マンドラゴラの根は土から抜けるときに恐ろしい叫び声を発して、それを聞いたものは立ち所に死んでしまうからである。げんに可哀想な犬はその場で死に、マンドラゴラを掘った穴のなかに埋葬される。（種村氏「マンドラゴラの旅」）

マンドラゴラのすさまじい叫び声は、シェクスピアの『ヘンリー四世』や『ロミオとジュリエット』の中にも比喩として登場する（同じシェクスピアの『アンソニーとクレオパトラ』には、催眠剤としてのマンドラゴラを欲しがるクレオパトラの科白が見られる）し、ここに引いたマンドラゴラの採取法は、ドイツの作家アヒム・フォン・アルニムAchim von Arnim（一七八一～一八三一）の小説*Isabella von Ägypten*（『エジプトのイザベラ』）にも、そっくり登場する。女主人公ベラは、「夜半の十一時に黒い犬をともなって、無実の罪で縛り首にされた男が草の上にはらはらと涙をこぼした絞首台の下まで赴き」マンドラゴラを採取しようとするが、その植物たるや「縛り首にされた男の無実の罪を着て零した涙から産まれた子供」（一九七五年、国書刊行会刊、『世界幻想文学大系』第四巻、深田甫訳による）であると、アルニムは書いている。

ドイツには、絞首刑に処せられた男がいまわの際に洩らす精液や尿が土に滲みこんでマンドラゴラが生まれるという伝説があり、この伝説は、遠くギリシャ神話やペルシャ神話、果ては中世カバラ学者による聖書神話にもいくつもの祖型を見出すことができるという（ミルチャ・エリアーデMircea Eliadeは、このようなマンドラゴラ伝説の神話学的意味について、その論文「ガヨーマルト・アダム・マンドラゴラ」及び「ルーマニアにおけるマンドラゴラス信仰」において興味深く論じている。それぞれ、せりか書房刊『エリアーデ著作集』第十三巻、第十二巻所収）。

ここで想起するのは、さきにも引いた『広五行記』に見える中国の人参伝説である。人参の異名として、土精、地精があるのは前に述べた通りだが、李時珍は、この『広五行記』の文を引いてから、だから土精と名づけられたのだと言っているが、土から産する人間の形状をした植物という点では、人参もマンドラゴラも同じものだといえよう。おまけに、両者とも奇怪な叫び声をあげるのである！

ワクワクとマンドラゴラに限らず、類似の植物伝説は数知れない。中でも、ペルシャのフィルダウシーFirdawsīが一〇一〇年に書きあげた叙事詩*Shāh Nāmah*（『王書』）の十五世紀ごろの写本に、「おしゃべりの木」という木の枝に、人間のみならず馬、羊、狼、豹、犬等々のたくさんの動物の頭部が生（な）っている挿し絵（いま、前掲*Painting in Islam*, Plate XXXVIII に見ゆ。図3参照）が載っているのが興味をひく。『王書』のこの部分はペルシャにおけるイスカンダル（紀元前四世紀ギリシャのアレクサンドロス大王のこと。十二世紀ペルシャの詩人ニザーミーNiẓāmīにもイスカンダル伝説を詠んだ*Iskandarnāmah*がある）伝説に触れたものであるが、この時代の西方の人々の、東方への関心の一端を示すものといえよう。これは又、十四世紀イギリスのジョン・マンデヴィルSir John Mandevilleの*Mandeville's Travels*（大場正史訳『東方旅行記』一九六四年、平凡社刊。東洋文庫19）の次の条りと照応をなす。

カタイ〔シナ〕から大小のインドへむかう人はカディルへと呼ばれる、大きな王国を通りぬけるだろう。そこには、ひょうたんのように大きな果実がなり、熟したものを割ると、中に肉も血も

図3　イスカンダルと「おしゃべりの木」

骨もある獣が一匹はいっている。それはまるで毛のない小羊みたいである。その国の住民はこの獣も果実も食用とするが、まことにふしぎなことである。だが、わたしは彼らにむかって、自分にとってはちっともふしぎではない、なぜなら、自分の国では、ベルナケ（黒がん）という鳥になる果実をつける樹木があるからで、その果実は美味である、そして、水中に落ちるものは飛び去るが、地上に落ちるものは死んでしまう、と教えてやった。

周知のように、マンデヴィル自身は「東方旅行」をしたわけではなく、従ってその『旅行記』も、主として十三世紀フランスのヴァンサン・ド・ボオヴェ Vincent de Beauvais の *Speculum Naturale*（『自然の鏡』）や十四世紀イタリアの旅行家オドリコ・ダ・ポルデノネ Friar Odorico da Pordenone の *Descriptio Orientalium Partium*（『東洋紀行』）などに、幾んど剽窃したといっていい程に拠りつつ編纂したものである。ここにあげた条りも、これらの書に拠っているが、『自然の鏡』では、この植物はヨーロッパ東南部の黒海やカスピ海方面の産としているため、「スキタイの羊」として有名なものである。又鳥になる果実の話も、ヨーロッパ各地に伝わっていた（澁澤氏前掲書三五五頁に見える「果実がアヒルになる樹」の図など参照）。

他にも、澁澤氏によれば、半ば人間のような外観をして臍で地中の根と繋がり、まわりの草を食い荒らしたり近づく者すべてに襲いかかる「ヤドゥア」、祭の日に叫び声を出し、その声を聞いたら一年以内に死ぬという「サルラーハ」などがインドに生育すると、西方に伝えられていた。これらの伝承の起点は殆んどが中世アラビアの文献であり、以上にあげた諸書の他にも、アル・ジャーヒズ al-Jāḥiẓ（七六七～八六八）の *Kitāb al-Ḥayawān*（『動物の書』）や十三世紀のイブン・アル・バイタル Ibn al-Bayṭār の *Kitāb al-jāmiʿ fī-l-adwiya al-mufrada*（『薬用植物集成』）などが、奇怪な植物伝説にも多く触れているようである。

ともあれ、この種のワクワク伝説、マンドラゴラ伝説のヴァリエーションが、いわゆる大航海時代の魁（さきがけ）をなすヨーロッパの「中世の秋」に、東洋への憧れを秘めつつ簇生していたことに注意されたい。これらの伝説を摧いたいわば真率な旅行家がマルコ・ポーロだったのである。その『東方見聞録』には、もはやこれらの面妖な植物は顔を見せない。……

四　押不蘆と人参果

ところで、ヨーロッパのマンドラゴラ伝説は、そっくりそのままの形で中国にも伝わって来た。南宋末の周密の著『癸辛雑識』続集に「押不蘆」なる一項あり（同じく周密の『志雅堂雑鈔』にも同じ文章を収める。但し、一部に字句の異同あり）、次のように見える。

回回国の西数千里の地に極めて毒性のあるものが産する。すべて人間の形をしていて人参に似ている。土地の言葉（原文は「酋名」）で押不蘆（ヤーブールー）という。土中深く数丈のところに生えるが、人がも

し誤ってこれに触ったりすると、その毒性（原文は「毒気」）で必ず死んでしまう。これを取る方法は、先ずまわりに人ひとり容るほどの大坎を掘る。しかるのち、皮條をそれに絡ませる。皮條の系は犬の足に繋りつける。こうしておいて、杖で犬を打って追いたてる（原文は「用杖擊逐犬」）。犬が逸り、根は抜けるが、犬は毒性ですぐ死んでしまうので、あとで坎に埋め、一年後に取り出して曝し乾かして別に用いる。ところでその（押不蘆の）薬性だが、少しの酒と混ぜて人に飲ませるときまって全身が麻痺して死んでしまい、その死体に刀や斧で力を加えても分らない。しかし三日後に、別に薬を少し投ずると、すぐさま生きかえるのだ。むかし華陀（正しくは華佗。後漢から三国にかけての名医。曹操の侍医となるがのち反抗して獄死す）が胃腸の病いをよく治したというが、きっとこの押不蘆を用いたに違いない。当節では御薬院（天子の薬を司る役所）もこれを蓄えているという。白廷玉（名は珽。廷玉は字。宋末元初の文人）がこんな話を聞いたそうだ。いまの汚職役人どもがしこたま私腹を肥やして訴えられると百日丹とやらを服用するが、それはこの押不蘆に違いないと、盧松厓（未詳）が言っていたとか。

この押不蘆とは、ベルトールド・ラウフェル Berthold Laufer の論文 "La Mandoragore" (*T'oung Pao*, 1917, pp.1～30. 馮承鈞による漢訳が、一九五六年、中華書局刊『西域南海史地考証訳叢五編』に収められている）及び *Sino-Iranica. Chinese Contributions to the History of Civilization in Ancient Iran*, 1919, Chicago, pp.447, 585 によれば、マンドラゴラを意味するアラビア語の yabruh/abruh（ペルシャ語では jabrūh）の漢字音訳であるという。周密のこの文章は、さきに種村氏の文章によって紹介した西方におけるマンドラゴラ採取法を、そのまま伝えている点で甚だ注目される。ただし、マンドラゴラのすさまじい叫び声については述べておらず、逆に、穴埋めした犬の屍骸をどうこうすると述べている点は西方のマンドラゴラ伝説には見当たらない。恐らく、長い伝播の過程で脱落したり付加されたのであろう。

周密は宋末元初の人、宋滅亡後は湖州（南宋の都臨安の近く）に隠棲して、有名な『武林旧事』十巻を著わして臨安盛時の活況を具さに伝えたほか、『斉東野語』二十巻の著もある。周密は回回国つまりアラビアを中心とするイスラム圏の風物に関心をもっていたらしく、この『癸辛雑識』には、「回回～～」と題する文章がいくつか収められている。

ところで、周密は回回伝来の知識をどこから仕入たのであろうか。周密に限らず、宋元間の知識人は、主として現福建省に位置する当時の大貿易港泉州を出入する西方の船がもたらす風物に関心を持った。泉州は、西欧世界では今でも Zayton の名で知られ、当時は蕃坊と称する回回人専用の一大居留地区まで設けられていた。蒲壽庚なる漢名を有するアラビア人（蒲はアラビア語 Abu の対音。Abu 姓であることはわかるが名は未詳。もっとも、張秀民氏は「蒲壽庚為占城人非阿拉伯人説」なる論文において、蒲壽庚とはアラビア人では

なく占城人であると論じている。占城とはCampaあるいはCampapuraの対音で現ヴェトナム中南部にあたる。この問題は興味ぶかいので再考に値しよう。なお該論文は『蘭州大学学報』哲学社会科学版一九七九年第一期所載）のごときは、福建路の提挙市舶（貿易関係を司る役所の長官）にまで任ぜられて、強大な勢力を誇った。周密の『癸辛雑識』続集下にも、「泉南」の「巨賈南蛮回回」で蒲姓の者のことが誌されている。

当時の泉州交易の繁栄ぶりは、南宋のこれも福建路提挙市舶であった趙汝适の著『諸蕃志』（宝慶元年、一二二五年の自序あり）があり、いまは馮承鈞による校注本（一九三七年初版。一九五六年、中華書局刊）によって容易に見ることができる。

この『諸蕃志』によると、泉州にもたらされた諸国の珍貨は数知れず、それは又、泉州から諸国へもたらされた珍貨とて同様であった。なかんずくイスラム圏との交易は、唐代こそ泉州以外の港において盛んであったが、宋元代は泉州が中心であった。

杜環の伝えた大食国（アラビア）の赤ン坊の生る木のみならず、遠い異国の風物に関する異聞は、泉州をはじめとする港に出入する船によって絶えまなく語り伝えられ、驚きをもって人びとのあいだにひろまったことであろう。

西方世界に伝えられたワクワク島の珍果ワクワクも同じことである。中国人がアラビアのものとして記録し、アラビア人が中国より更に東のワクワク島のものとして伝えた人間の生る木は、空想の産物であるがゆえに、日常の認識の及ばぬはるかなる異国のものでなければならない。人間の好奇心というものは、常にこうして未知の領域へと想像力を羽ばたかせるもののようである。

人間の生る木の話は、しかしどうやら杜環がアラビアのものとして伝えたのが古いのであろう。その話を、泉州あたりで中国人がアラビア人にきき質す。アラビア人は知らぬと言う。それでは、中国よりももっと東の倭国（ワクワク）のものかも知れぬ、と中国人が言う。彼の脳裏には『十州記』や『神異経』あたりに頻繁に見える「東方」や「扶桑」の珍果のことが浮かんだであろう。恐らくこの類いの会話が交錯しつつワクワク伝説が形成され、アラビア人が西方へ運んだものと思われる。しかし、中国人は、この種の珍奇な植物については、西方の人びとほど熱心には語らなくなっていた。

北宋初期に編まれた『太平広記』には、人参果伝説は一切録されず、『神異経』『述異記』などに見える仙果についての異聞は録されているが、桃や杏など現実にありふれた果物については、空想による怪異譚は付会しにくくなったのであろう、荒誕なものは稀である。しかし、桃を西王母と結びつける伝説は依然として流行していた。一つだけ面白い例を挙げよう。北宋のエンサイクロペディスト沈括の『夢溪筆談』巻二十一に、雷州に奇妙な呪文が流行し、その呪文を聞けば、膾炙や熟肉はもとの生肉にもどり、又呪文を唱えれば生肉は動きだして牛なら牛にもどる。又呪文を唱えると、料理された形となるが、それを食べると腹中で動きはじめ、金帛を嚥みこまない限り腹が裂けて死んでしまうと見える。そして、その呪文とは、「東方王母桃、西方王母桃」というのである。

何ともふしぎな話であるが、呪文については後述するとして、物質なり動物なりが別の物質なり動物なりに変化するというのは、例えば遠く晋代の葛洪の著『抱朴子』などに夥しい例が見える。その種の変化をもたらすものが王母桃だというのは、女性の生殖からのアナロジーでごく自然な伝説であるといえよう。唐から北宋にかけての仙果伝説は、概ね以上の通りであったと思われる。

西方のマンドラゴラ伝説が、そのアラビア名押不蘆（ヤーブールー）と共に中国に入ったのは、周密の著などから察せられるように、南宋期であった。この奇怪な植物は、その形状からして、ただちに中国人に古い人参伝説を想起させたであろう。又、あまたの仙果伝説、なかんずく杜環が伝えた大食王国に産する赤ン坊の生る木の話などをも連想させたであろう。『詩話』の作者は誰とも知れぬ市井人であり、又作者が必ずしも一人と断定できぬが、ともかく、『詩話』の作者も亦、西方渡来のマンドラゴラ伝説に強い好奇心を抱いた一人であったと覚しい。

とはいえ、彼は、人参伝説と仙桃伝説とをいかに結びつけたのであろうか。いま、以上に挙げた東西の伝説すべてをモチーフで分類すると次の三種に整理できる。

A　土中に人間の形をした植物が生える。（マンドラゴラ、人参）

B　木に人間や動物が生る。（ワクワク、ヤドゥア、スキタイの羊、大食王国の木など）

C　何百（千、万）年に一度だけ結実する木が生える。（王母桃、如何樹など）

西方の諸伝説は、AかB、あるいはAとBの混合形である。とくにBが多く、これは植物から動物への変身譚ともいえよう。中国の諸伝説は圧倒的にCが多く、AはあってもCとの混合は絶無であり、Bは大食王国のものと録される少数例のみである。

もっとも、中国にもBのモチーフに似ていると思われる話は少なくない。古く『漢書』五行志下に、「成帝の永始元年二月、河南の街郵で樗（ぬるで）の樹に人の頭そっくりの枝が生えた。眉も目も鬚もすべて具わっていて、髪の毛がないだけだった。哀帝の建平三年十月、汝南の西平の遂陽郷で柱が地面に仆れ、人の形をした枝を生じた。体は青、黄色の顔、しらが頭で髭や髪はやや長い。全体の長さはだいたい六寸一分ぐらいだ。『京房易伝』は、王の徳が衰え、人将が起（た）てば、木が人の形になる、といっている」と見え、これはそっくり、二十巻本『搜神記』巻六にも見える。同『搜神記』巻六には、この種の「草妖」がいくつか記載されているが、中でも武器を手にし牛馬を弩（ど）す人そっくりの草が路傍に生えたという話は面白い。しかし、これらの話、注意ぶかく見れば、あくまでも「人の頭そっくりの枝」「人の体そっくりの枝や草」ということであって、ワクワクやマンドラゴラのように、人そのもの、動物そのものが植物に生（な）っているわけではない。人参やマンドラゴラにまつわる諸伝説も、もとをただせば、これらの植物の「人の体そっくり」の形状からのアナロジーによって生じたものである。とはいえ、一方は、植物から動物への変身譚へ発展したのに対し、中国では政治的教訓と結びついた「草妖」譚にとどまることが多かったのである。

しかるに『詩話』では、C→B→Aという、新しい型の話が語られているのだ。まず、西王母の蟠桃を猴行者がむかし盗み食いする話。これは、さきにも挙げた『漢武故事』における東方朔をそっくり猴行者に置き換えたものとして理解できよう。次いで、その蟠桃が池に落ちて赤ン坊になる話。ここに、植物から人間への変身譚としてのBがある。『詩話』の作者は、明らかに杜環による伝承を参照している。大食王国の赤ン坊の生る木は、「一つのま四角の石」の上に生えているのだが、『詩話』の蟠桃樹も「四五里四方もありそうな平たい岩」の上に生えている。その蟠桃が池に落ちて赤ン坊になり、更に人参になるためには、しかしその伝承だけでは助けにならないのではないか。

大食王国という地名は、押不蘆（ヤーブールー）の産地回回と一つである。赤ン坊の生（な）る木が産する大食王国すなわち回回には、人参そっくりの植物が生える――というように結びつかなければ、『詩話』における人参は誕生しない。もっとも、中国にも古く「人参が千年たったら赤ン坊になった（原文は「人参千歳爲小児」）」という、植物から動物への変身譚があったらしく（『太平御覧』に見ゆ）、それは『抱朴子』巻十一仙薬に記載されていたと覚しいが、現行『抱朴子』にも『抱朴子佚文』にも見えない。もちろん、『詩話』の作者は、この「人参千歳為小児」の七文字を知っていたであろう。それでも、大食王国と回回を媒介にしなければ、西王母の蟠桃は、赤ン坊になったり、次いで人参になったりすることはできないのである。そして、中国古来の伝承における人参とは全く別種の人参は、かくして誕生したのである。それは明らかに、明刊本『西遊記』における人参果の原型であった。しかし、『詩話』における人参は、同じく『詩話』における猴行者と同様き、その性格は甚だあいまいであり、かつ泥くさいものであった。それがやがて、幻の元刊本『西遊記』（『朴通事諺解』や『永楽大典』巻一三一三九は元刊本『西遊記』の一部を引用している）ではより明確に性格づけられたのであろう、明刊本『西遊記』では、さきのモチーフ分類におけるBとCとの混合形として、みごとな人参果として再生するのである。もっとも、この人参果は、素手で触れてはならず「金撃子」で叩き落とすあたり、押不蘆として伝えられたマンドラゴラ伝説の、とくに採取法に関する部分が色濃くのこっている。そして、土に落ちた人参果が地中ふかくもぐって見えなくなるあたりには、古来の人参伝説の名残りが、そのあとにつづく五行思想への付会とは又別に揺曳しているように感ぜられる。

ともあれ、『詩話』に登場する人参果の原型は、中国古来の諸伝説が、回回より入った西方の諸伝説を契機として新たに生んだ仙果であると思われる。ことがらは、猴行者こと孫悟空の誕生についても同様であり、それは別稿にゆずるが、いずれも、宋末元初の泉州の繁栄がもたらした傑作であった。

五　むすび

以上文献を追って人参果伝説の誕生までを大雑把にあとづけてきたが、いくつかの重要な点については故（ことさら）に避けておいた。それを少しく考えてみよう。

例えば、『夢溪筆談』の引く「東方王母桃、西方王母桃」という呪文である。ミルチャ・エリアーデはその *Le Mythe de l'éternel retour*, 1949（堀一郎訳『永遠回帰の神話――祖型と反復――』一九六三年、未来社刊）において、「ある種の草の呪術的及び薬用的価値もまた、同様に樹木の天上的原型とか、神によって初めて採集されたという事実に負うている。いかなる植物もそのものが貴重なのではなく、それがその祖型にかかわり合うことを通して、あるいは俗界から分離してそれを清めるある種のしぐさや言葉の反復を通して、初めて貴いものとなる」と述べた。エリアーデの神話学の最も基本的な理論がここには語られている。「東方王母桃、西方王母桃」という呪文は、王母の桃によってある物質の変化や再生をもたらすという、人間生活の祖型を反復するための契機にすぎない。同じくエリアーデが *Patterns in Comparative Religion*, 1958（堀一郎訳『大地・農耕・女性――比較宗教類型論――』一九六八年、未来社刊）でより詳細に論じているように、大地はそれ自身で地母 *Tellus Mater* であり、豊饒な生産力の神聖なシンボルであった。そこから生える植物は、生命のシンボルであり、死と再生のシンボルであり、宇宙のシンボルであった。わけても中国における桃が、『詩経』の「桃夭」詩があからさまに詠いあげたように、古代から生殖のシンボルであったこと言うを俟たない。なお、桃はその学名が *Prunus persica* であることからも分るように永らくペルシャ原産であると考えられていたが、中国原産（陝西、甘粛）であると判明した（中尾佐助『料理の起源』NHKブックス178、一九七二年刊、による）というから、「桃夭」詩も納得がゆくのである。それはともかく、桃が中国の古代神話においていち早く西王母伝説と結びついたのは、それが中国人の宇宙観形成の神聖な瞬間においてであり、だからこそ、その「祖型」はくりかえし「反復」されなければならないのである。西王母の桃が不老不死の仙果であり、やがてそれを盗むトリックスターが、東方朔や孫悟空として「反復」してあらわれるのも、こうして説明されるであろう。『夢溪筆談』に紹介されたこの呪文は、単なる異聞として片づけられてはならない。

この呪文によって料理された肉が生肉（なま）となり、もとの動物になるというのも、神話学的には興味ぶかいことである。王母桃が生殖すなわち無限の生産と再生のシンボルである以上、料理された肉つまり死んだ動物は、王母桃によって生命をとりもどす。大地とそこから生じる植物が、動物の再生のいわば鍵となっているわけで、ここまでくれば、くだんの呪文のもつ深い意味と、さて、本稿の主題である人参果のもつシンボリズムが明らかになるであろう。

再びエリアーデの『大地・農耕・女性』によれば、植物から人間（あるいは動物）への変身、あるいは人間から植物への変身の話は、「人間と植物との間の生命の継続する循環として観察される連帯性」として理解されるべきであるという。すなわち、「人間はすべて単純に同一の植物的子宮のエネルギーの投射であり、かれらは植物の過剰によって絶えず産み出されてゆく束の間の形態なのである。人間は一つの新しい植物の様式の、ある束の間のあらわれである」というのだ。エリアーデのこの思想は、実のところ、かの『抱朴子』

にあらわれた葛洪の思想と一つなのではなかろうか。飽くことなく神仙を論じ、仙薬を論じた葛洪は、生命の永遠性を変身によって説明しようと試みたふしがある。

葛洪と同時代の夥しい志怪書に、さきのモチーフ分類ではCにあたる、何百（千、万）年に一度しか結実しない仙果の話が飽くことなく語られるのも、恐らく以上のことと無縁ではないであろう。長命な植物の実が人間の体内にとりこまれて、人間も長命になる、いささかもどかしいこの種の話には「循環」の要素は絶無だが、しかし、長命な植物の代表として登場する桃を例とするならば、桃はもはや単なる桃ではありえず、人間の女性の生殖機構そのものなのである。

かくては、西王母の蟠桃が熟れてポチャンと池に落ちて赤ン坊となるのは、他ならぬ出産のシンボリズムであるが、その赤ン坊が乳棗となり、猴行者の胃袋におさまり、吐き出されて人参となり、明刊本の人参果となるめまぐるしい変身譚の連続は、くだんの「循環」の思想を底流として秘めているといえる。因みに、この乳棗なるものも、『詩話』以外には見えぬ仙果であるが、六朝時代に流行したいわゆる爛柯説話を見るまでもなく、棗も桃と同様にとこしえの時間すなわち生殖や再生のシンボルであった。

さて、『詩話』の作者は、すでに述べたように、誰とも知れぬ市井人であった。彼は、荒誕な話を極力排し詩文を洗練させるべくつとめた宋代読書人の意識とは別に、語りもの演芸の世界に、「祖型」の「反復」を大胆に持ちこんだのである。その契機となったものが、西方世界との交易であったという素朴な現実に、われわれは瞠目しなければならないであろう。なればこそ、人参果の美味もわれわれのものとなる。……

【付記】

本稿はもともと竹内照夫先生（元本学教授。現常葉学園短大教授）の古稀をお祝いする論文集のために執筆したもので、次のような序を付した。

嘗從竹内教授照夫先生學中國哲學史時先生春秋鼎盛竊以爲先生形容頗肖古之神仙蓋先生有時喫以仙果歟先生南歸而久矣時値先生古稀嘉辰雖先生之壽既而無可疑也於此乎欲獻于先生以人蔘果而庶幾先生之春秋愈盛聊以報學恩耳昭和己未九月受業中野美代子謹識

その後、該論文集の発刊が都合により一年延期された。竹内先生に献ずべき人参果が腐ってもいかがかと思量し、該論文集に先んじて茲に結実させ、同先生に贈呈申し上げることとした。ねがわくば人参果の美味のいささかなりとも伝わらんことを。一九七九年十一月記。